

論文 article

行田市のまちづくりに関するワークショップの定量評価と 運営手法に関する基礎的研究

原稿受付 2015年10月7日

ものづくり大学紀要 第6号 (2015) 43~48

東恩納暖^{*1}, 木村奏太^{*2}, 田尻要^{*3}, 守家志^{*4},^{*1} ものづくり大学大学院 ものづくり学研究科 ものづくり学専攻^{*2} ものづくり大学大学院 ものづくり学研究科 ものづくり学専攻^{*3} ものづくり大学 技能工芸学部 建設学科^{*4} ものづくり大学非常勤講師

Basic research on quantitative evaluation and management method of workshop
on town planning of Gyoda city.

Dan HIGASHIONNA^{*1}, Sota KIMURA^{*2}, Kaname TAJIRI^{*3}, Kazushi MORIYA^{*4}^{*1} Graduate Student, Graduate School of Building Technologists, Institute of Technologists^{*2} Graduate Student, Graduate School of Building Technologists, Institute of Technologists^{*3} Dept. of Building Technologists, Institute of Technologists^{*4} Visiting Researcher, Institute of Technologists**Abstract**

Intention of the residents, were obliged to reflect on urban development from amend the town planning law in 1992. In the case of Japan, did to the workshop in order to reflect the intention of the residents to town planning. Moreover, style of town planning workshop was born to the some style by the research. However, research of workshop method that took into account to the regional characteristics is scarce. And so, need to verify using the existing workshop method, to compare the relatively different workshop method. In this research, took into account to the "little participants of the workshop experience" that is regional characteristics of Gyoda city, to seek a valid workshop method. Moreover, this research was verified using the World cafe (WC) method and the KJ method. As a result, it is found that the WC method is effective in workshop inexperienced person. moreover, found that the KJ method is effective in workshop experience person. WC method and KJ method are able to opening to effectively workshop by hybrid operational.

Key Words : Planning city, Workshop method, World cafe method, KJ method, Consensus building,

1. はじめに

近年の日本におけるまちづくりは、平成4年に行われた都市計画法の改正により、まちづくりに住民の意向を取り入れることが義務付けられた。まちづくりを進めるにあたり行政や住民等のまちを構成するステークホルダー間で合意形成を図る必要がある。合意形成を図る一つの手法として地域

住民・行政・大学などが主体となり相互に話し合いによる連携をとることで、まちづくりを進めるワークショップ(以降 WS と略)手法を用いるのが平成4年以降一般的となっている¹⁾⁻³⁾。現在、WSは全国で実施されるようになり、WSの運営手法は都市計画の分野において多様化が進み、様々な地域で検証が取り組まれている。

一方、行田市は全国の地方自治体と比較して、WSによるまちづくりの実績が浅く、住民のWS経験が少ないのが現状である。また、WSの手法は数多くあるが、地域特性の影響を考慮した検証は多くはない。したがって、行田市の地域特性であるWSの実績が浅い地域において、WSの経験が少ない参加者を対象に、既存のWS手法の中から異なる手法を用いて相対的に検証し、WSが参加者に及ぼす影響を把握することが重要であると考えられる。

そこで本研究では、全国の地方自治体に比べWS経験の少ない行田市の地域特性に着目し、WS手法の中でも一般的な手法であるKJ法と、比較的新しい手法であるワールドカフェ方式の2種類の手法を定量的に評価⁴⁾し比較を行った。さらに経験の少ない自治体の運営について最適なWS手法の基礎的な検討を行った。

2. WSの概要

本調査は平成26年度に改定した行田市内の2つのWSについて比較を行った。まず、ワールドカフェ方式で開催された「行田市まち並み・にぎわいWS」（以降まちにぎWSと略）とKJ法で開催された「JR行田駅前周辺のまちづくりに関するWS」（以降JR行田駅WSと略）において、参加者の発言内容に着目し調査を行った。WSの概要をTable1に示す。

Table1 Overview of WS

名称	まちにぎWS	JR行田駅WS
WS手法	ワールドカフェ方式	KJ法
開催回数	全5回	全4回
開催場所	行田市役所 行田市産業文化会館	太井公民館
ファシリテーター	ものづくり大学 田尻研究室	大手都市計画 コンサルタント会社
述べ参加人数	41人	25人
グループ数	4~6グループ	4グループ
目的	秩父鉄道行田市駅 周辺のまち並みと にぎわい創出	JR行田駅周辺の まち並みの整備
主催	行田市都市整備部都市計画課	

2.1 検証するWS手法の特徴

検証するWS手法の特徴を(1)(2)に示す。

(1) ワールドカフェ方式

カフェのようなリラックスした場を設け、一定時間を1ラウンドとして区切り、グループごとに設定されたテーマについて議論を行う。1ラウンド経過後、グループに残る一人(ホスト)を決め、他の人(ゲスト)は違うグループへと移動する。移動完了後2ラウンドへと入り移動先のホストと他グループからのゲストと議論を行う。ラウンドを複数回繰り返した後、最後にゲストは元のグループへと戻り、最終的なグループでの意見を取りまとめる。

(2) KJ法

比較的一般的なWS手法である。参加者がテーマにそった1意見を1カードに要約して書き出していく。書き出したカードを、似通ったものでいくつかのグループにまとめ、さらに図解化や叙述化をして、まとめていく手法である。主に創造性開発や創造的問題解決に効果があるとされている。

3. WS手法の調査・分析

ワールドカフェ方式の「まちにぎWS」とKJ法の「JR行田駅WS」において、参加者の発言内容を詳細に把握し抽出するため、各テーブルにボイスレコーダーを設置し、各WSの議論内容の録音を行い、文字データの整理を実施した。整理の際は時系列に考慮し発言者・発言時間・発言内容を抽出した。抽出データの概要をTable2に示す。

Table2 Overview of the extracted data

項目	まちにぎWS	JR行田駅WS
録音時間	約270分	約480分
総発言数	676件	455件
総意見数	416件	318件

一般的なまちづくり WS における討議内容の構成は、「現状把握」「問題提起」「改善提案」「運用方法」の流れで行われる傾向がある。その中で、各 WS の討議内容に関らず共通である「問題提起」と「改善提案」に着目し分析を行った。各 WS 手法が WS 経験の少ない参加者に及ぼす影響を把握するため、参加者へのアンケートを行った。調査内容は性別・年齢・名前・WS 参加経験の有無(JR 行田駅 WS のみ調査)について各 WS の新規参加者を対象に調査を行い、各参加者を2つに大別し WS 経験者と WS 未経験者とした。また、抽出した発言を"各回に設定されたテーマからの距離"と"発言内容のポジティブまたはネガティブ"の2項目を評価軸とし、それぞれ分析を行った。

(1) 各回に設定されたテーマからの距離

各回に設定されたテーマを基準に、テーマに沿った発言を"近い"。テーマから離れた発言を"遠い"。テーマとは関係のない雑談や、聞き取れない発言を"非該当"とし、3段階で評価した。

(2) 発言内容のポジティブまたはネガティブ

発言内容から前向きな発言を"ポジティブ"、後ろ向きな発言を"ネガティブ"とし、またどちらにも属さない発言を"非該当"とし、3段階で評価した。

次に参加者の基礎属性を Fig.1 に示す。基礎属性はアンケートにより抽出したものであるため各 WS の参加者全てを把握しているわけではなくあくまで解答者の基礎属性となっている。また、まちにぎ WS の WS 経験の有無については受付時のヒアリングにより、参加者全てを網羅している。

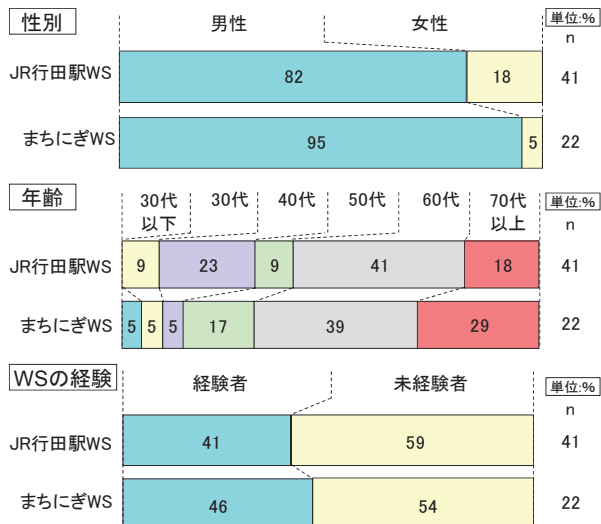


Fig.1 The basic attributes of participants

3. 1 ワールドカフェ方式の参加者の傾向

3. 1. 1 WS 参加者属性別の発言活発度

ワールドカフェ方式を用いた WS における参加者の発言から、参加者属性別による発言のテーマからの距離を Fig.2 に示す。縦軸はテーマからの距離を表し、横軸は経過時間を表している。また、グループワーク時間を3分割し、開始時間から順に"ステージⅠ","ステージⅡ","ステージⅢ"とした。

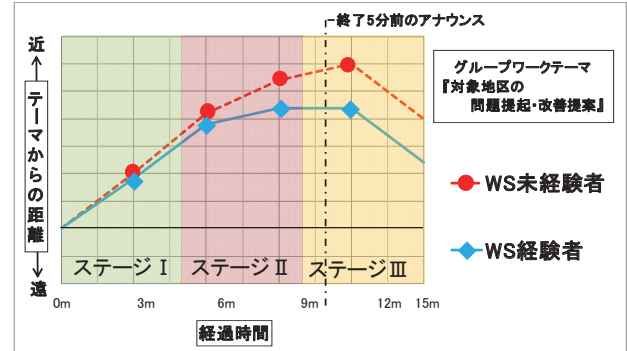


Fig.2 Distance of remark for the theme to by the difference in the workshop experience.

(1) WS 未経験者

WS 未経験者はグループワークの時間全体を通して比較的テーマと近似する発言が多い傾向であった。その要因として WS 未経験であることから設定されたテーマに従順になると考えられる。時間の経過による WS の馴れ、ホストによる説明や進行の理解もあり、積極的な参加意向が伺える。また、ステージⅠからステージⅡにかけてテーマに近い発言数が増加するが、12分を経過すると減少傾向となる。これは残り5分のアナウンスが入り、ファシリテーターによる担当グループの議論の取りまとめに入ったためと考える。

(2) WS 経験者

WS 経験者は WS 未経験者と比べ、設定されたテーマから遠い発言が多く見受けられた。これは WS 経験者は比較的自由的な発言をすることで、テーマの背景など、より大枠部分から本質を捉える傾向があると考えられる。また、ステージⅠからステージⅡにかけて WS 未経験者と同様に、テーマに近い発言が増加するが、12分を経過し減少傾向となる。残り5分のアナウンスにより、ファシリテーターが担当グループのとりまとめに取り掛かったことで、WS の経験の有無に関わらず、ファシリテーターの進行には従うことが分かる。

3. 1. 2 経過時間ごとの発言の活発度

ワールドカフェ方式を用いたWSにおける参加者の発言から、参加者属性別のWS発言の活発度を表したものをFig.3に示す。また、縦軸はテーマからの距離を表し、横軸は発言内容のポジティブまたはネガティブを表す。

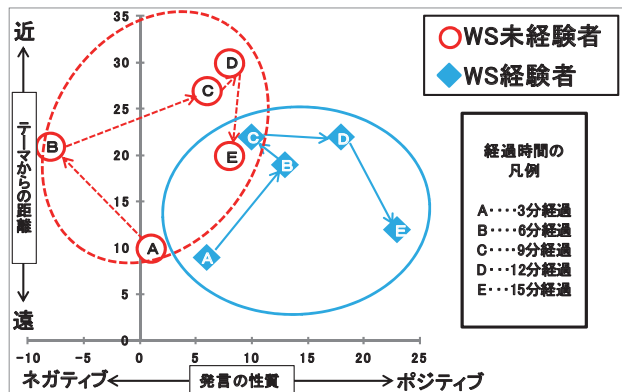


Fig.3 Activity degrees of remark to by the difference in the workshop experience.

(1) WS 未経験者

WS 未経験者では時間の経過とともにポジティブな発言が多く表れる傾向となった。特にグループワーク開始の3分～9分の間に、ネガティブな発言がポジティブな発言に転換した。これは、ホストによる今までの他者の発言などを受けての傾向であり、WS 未経験者は他者の発言を基に、柔軟な意向で議論を行えることが伺える。

(2) WS 経験者

WS 経験者はグループワーク開始から通して、ポジティブな発言が多い傾向であった。しかし、テーマに近似する発言はWS 未経験者より少ない傾向が見受けられた。ポジティブで活発に意見交換を行うものの、その内容が広域にわたり、限られた時間の中で設定したテーマの本質までたどり着かない場合もあると考えられる。一方で、WS 経験者の中には、事業の実現につなげるために、ポジティブな発言を行い住民の意向を高くする、いわゆる戦略的バイアスが働くこともあり、そのバイアスに関する対応も重要である。

3. 2 KJ 法

3. 2. 1 WS 参加者属性別の発言活発度

KJ 法を用いた WS における参加者の発言から、参加者属性別による発言のテーマからの距離をFig.4に示す。縦軸はテーマからの距離を表し、横軸は経過時間を表している。また、グループワーク時間を3分割し、開始時間から順に"ステージⅠ","ステージⅡ","ステージⅢ"とした。

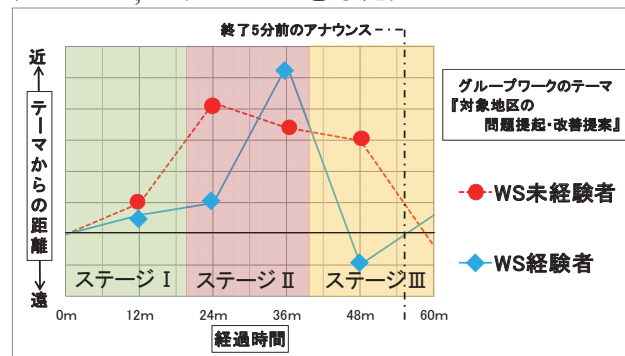


Fig.4 Distance of remark for the theme to by the difference in the workshop experience.

(1) WS 未経験者

WS 未経験者はステージⅠからステージⅡにかけて設定したテーマに近似する発言が増加し、ステージⅡからステージⅢでは、テーマから離れた発言が目立つようになった。これは、WS に慣れていないため、ステージⅠの期間はWSを特に理解しようと、テーマから離れないよう意識し発言していると考えられる。また、ステージⅠからステージⅢにかけては、時間の経過とともにグループ内の議論が煮詰まった為に減少したものとする。WS 未経験者はテーマに固執した意見交換となりやすく、内容の発展性に乏しく、グループワーク後半のファシリテーターの役目が重要となる。

(2) WS 経験者

WS 経験者はステージⅡの24分～36分にかけて、突発的にテーマと近似する発言が増加し、36分～48分にかけては反対にテーマから離れた発言が多くなる傾向であった。これはグループワークの途中で雑談等でテーマから逸脱したことが影響したと考える。WS 経験者においてはテーマに沿ったものか否かよりも、ある発言について活発に質の高い議論をする傾向があると考えられる。

3. 2. 2 経過時間ごとの発言の活発度

KJ法を用いたWSにおける、参加者の発言から参加者属性別のWS発言の活発度を表したものをFig.5に示す。また、縦軸はテーマからの距離を表し、横軸は発言内容のポジティブまたはネガティブを表す。

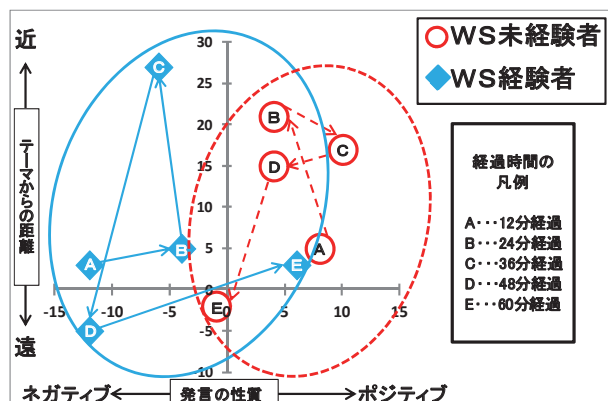


Fig.5 Activity degrees of remark to by the difference in the workshop experience.

(1) WS 未経験者

WS 未経験者は、グループワーク全体を通じて、ポジティブな発言が多く、特に開始12分～48分にかけては活発に議論が行われた一方、終盤は発言の活発度や有意性も減少し、収束する傾向であった。また、WS 未経験者は設定されたテーマを肯定的にとらえる傾向が強く、テーマの是非など、本質の議論に至らない場合もある。

(2) WS 経験者

WS 経験者においては、全体を通して、ネガティブな発言が出やすい傾向であった。また、開始24分～36分にかけては、瞬間的にテーマと近似する議論が集中した。さらに、WS 経験者は、設定されているテーマの是非も含め多角的な視点から議論され、ファシリテーターや他者の発言の影響も少ないことが伺える。ここで議論され抽出された課題は大変有効で、テーマの本質に大きく影響を与えるものであり、解決方法も重要となる。

4. 総括・知見

本研究では以下のような知見が得られた。

(1) ワールドカフェ方式 WS 未経験者

WS参加が未経験であることから設定されたテーマに従順であり、経過とともにWSに馴れ、ホストによる説明や進行の理解もあり、積極的に参加し

ている。さらにホストの説明を基に、柔軟な姿勢で議論を行える。

(2) ワールドカフェ方式 WS 経験者

WS 経験者は、比較的自由的な発言をすることで、テーマの背景など、より大枠な部分から本質を捉える傾向がある。さらに、WSに慣れていることからポジティブで活発で自由的な発言が抽出でき有効である一方で、ポジティブな意向から事業進捗に影響を与える戦略的バイアスが働くこともあり、そのバイアスに関する対応も重要である。

(3) KJ法 WS 未経験者

WS 未経験者もテーマと逸脱しない発言の抽出に有効である。ただし、グループワーク後半においては、内容の発展やテーマの是非などの本質までに至らない場合もあり、その期間におけるファシリテーターの役目が重要となる。

(4) KJ法 WS 経験者

WS 経験者は、設定されているテーマの是非も含め多角的な視点から議論し、ファシリテーターや他者の発言の影響も少ない。抽出された課題は有益で、テーマの本質に大きく影響を与えるものである。

(5) WS 手法別の知見

ワールドカフェ方式ではWS 未経験者でもホストによる説明からWSに馴れ、内容を理解し、積極的に参加できる点に着目する。

KJ法ではWS 経験者から、有益な課題が抽出でき、その課題解決手法を検討することが、事業の優位性にも繋がること挙げられる。

以上から、グループワーク内容と、参加者に与える影響を考慮したWS手法をマッチングさせることで、より有益なWSが開催できるものとする。

5. 課題と今後の方針

本研究では、ワールドカフェ方式ではWS未経験者に有効で、KJ法ではWS経験者に対してより有効なことが明らかになった。WSの開催実績が少ない地域においては、WS未経験者が多いことから、ワールドカフェ方式にて取り掛かることで有益な意向が抽出できると考える。また、参加者のWS経験の有無により、発言の意向が大きく異なることから、1つのWS手法で、参加者のすべての意向抽出は困難である。今後は参加者のWS経験の有無や、参加者属性を考慮した、複合的なWS手法を用いた運用手法を検討していく。

Table3に、本研究における複合したWSの運用手法案を示す。

Table3 Operation method of effective workshop

対象地域	まちづくりWSの実績が少ない地域
参加者選定方法	一般募集による参加者の固定化
グルーピング方法	事前アンケートにより、WS経験別にグルーピング
グループワーク内容	現状説明+現状共有認識
	KJ法を用いた「問題点の抽出」 WC方式を用いた「改善の提案」

まちづくりWSの実績が少ない地域においては、WSの参加者を固定化し、事前アンケートからWS参加経験の有無によるグルーピングを行うことが望ましい。その中で、複数WSが開催される場合、自由参加であると、参加人数が一定になりにくく、グルーピングによるWS経験者とWS未経験者の区分が困難となる点に留意する。また、WS経験者は、WSのテーマの背景や大枠から多角的な視点での発言が有益であるが、WS熟練者となるとWS未経験者へ意図した誘導・影響を与えかねないため、その影響も考慮したWSの経験によるグルーピングは有効である。

最後に、グループワークの内容により、WS手法を変えることも有効である。グループワークの"問題提起"の際には、WS経験者に特に有効であったKJ法を用い、"改善提案"の分野では、WS未経験者でも積極的に参加できるワールドカフェ方式を用いることで、WSの経験に影響されない有益なWS

の運用と意向抽出ができる。今後はこの複合的なWS手法が、WS実績の少ない地域において有効であるか、今回検証した二つのWS手法と異なるWS手法も比較対象として挙げて、検証する方針である。

謝辞

本研究を進めるにあたりご協力をいただいた「行田市都市整備部都市計画課」関係各位の皆様へ深謝申し上げます。

参考文献

- 1) 倉原宗考：市民的まちづくり学習としての住民参加のワークショップに関する考察，日本建築学会計画系論文集，No.520，pp. 255-262，1999.
- 2) 原田恒平ら：千葉市栄町における住民参加型まちづくりワークショップ，日本建築学会学術講演梗概集，pp. 25-26，2009.
- 3) 樋口忠彦ら：公園づくりにおける住民参加型ワークショップの実態調査とその評価に関する研究-鳥屋野潟公園ワークショップを対象として-，日本建築学会北陸支部研究報告集，Vol. 43，pp. 337-340，2000.
- 4) 村田義郎ら：住民参加による住まいづくりの設計手法としてのワークショップの可能性とその要件-西折尾地区住環境整備事業を事例として-，日本建築学会技術報告集，No. 12，pp. 169-172，2001.
- 5) 小笠原郷太ら：地域住民参加型の景観形成手法の考察と提案-島根県益田市を対象として-，平成24年度日本建築学会近畿支部研究発表会，pp. 653-656，2012.
- 6) 石橋徹ら：住環境計画初期における住民参加型ワークショップの過程と参加者の評価-函館市元町の事例-，日本建築学会北海道支部研究報告集，No.69，pp. 417-420，1996.